山下靖子氏　学位請求論文審査報告書

論文題目：戦後沖縄問題を巡るハワイの「沖縄系移民」に関する国際社会学的研究
—日本とアメリカの狭間で「オキナワン」であるということ—

Ⅰ．論文の要旨

本論文は、これまで日系移民の一部として扱われてきた沖縄系移民の意識の表れ方について論じている。沖縄の帰属ならびに返還の問題を巡り、「オキナワン」であることの意識がどのように形成されたのか、その意識の形成過程に影響を与えたとされる重層的な関係を、歴史的文脈に位置付けながら理解しようと試みるものである。沖縄系移民の意識形成に影響を与えた契機として、沖縄の帰属問題と沖縄返還に焦点を当てるのは、沖縄系移民の意識を規定してきた戦前からのヤマトと沖縄の関係に変化が生じたと考えられたからである。この論文の特徴は、ハワイの沖縄系移民の意識のあり方を、(1)戦前の日本と沖縄の関係、(2)ハワイにおける沖縄と他府県人の歴史的な関係、(3)冷戦下の国際関係、(4)ハワイの地域的特性といった重層的な構造と関連させながら明らかにしているところにある。戦後ハワイの沖縄系移民の「オキナワン」であることがどのように変化していったのかという問いに対して、沖縄とヤマトの関係が変化したときに沖縄の人びとの意識の表れ方にも変化が見られるという仮説を立て、エスニシティの変化を「回復」という用語を用いて分析するが、「回復」を巡る考察を深めるために湧川清栄の思想を分析の対象に含めている。

序章では、最初に沖縄系移民のエスニシティのあり方を捉える際の枠組みとして、歴史的分析の視点と地域研究による重層的な関係性を重視する国際社会学的なアプローチについで述べている。

分析枠組みとしてのエスニシティ論の先行研究については、アイデンティティに関する議論を中心に、1.アイデンティティの背景にある権力関係、2.主観的な帰属とアイデンティティ、3.アイデンティティの可変性、4.エスニシティのスティグマ化、5.エスニック・アイデンティティの重層性について扱った研究を検討している。この論文では、エスニシティを移民の意識のあり方/文化様式を表す総称とし、「オキナワン」を沖縄系であるという意識、沖縄系移民のアイデンティティを表象することばとする。エスニシティを捉える方法として、自分が「オキナワン」であるか否か、エスニシティ/アイデンティティを直接問うのではなく、ある契機においてどのように表出してくるのかを把握する。具体的には、この論文の仮説で示されるように、本土と沖縄の関係が変化するとき、「沖縄問題」をめぐる沖縄系移民の意識の表れ方がどのように変化するのかを見ることで把握される。

沖縄移民およびアジア系アメリカ人研究の関連する先行研究については、1.二重の差別構造（崎原）、2.1960-1970 年代の公民権運動を背景とする日系アメリカ人研究/公民権運動の展開が異なるハワイの地域性を扱った研究、3.プランテーション時代のエスニシティと階級

の重なりから日系人を分析した研究（タカギ）、4.沖縄系移民独自のアイデンティティの研究（ウエウンテン）、5.日本と沖縄の権力関係を捉えたアイデンティティ・ポリティクスの研究（アラカキ）、6.超国家的な社会空間を生み出す沖縄系移民ネットワークの研究（新垣）、そして 7.歴史と国際関係の視点から冷戦構造の中に沖縄移民を位置付け、地域により異なるローカルなアイデンティティについて論じる研究（カネシロ）に触れている。

また、論文の対象期間（1945-1972）に関連する先行研究については、米国の沖縄統治政策への沖縄系移民の取り込みを指摘した研究（岡野）が示されている。

最後に、示唆に富む国際社会学的なアプローチの研究として、祖国での韓国と日本の関係がハワイの韓国系移民のアイデンティティの再生に与えた影響を扱った事例（李）、出身地でのトルコ人とクルド人の抑圧/被圧的な関係が、移動先オランダで再現され、クルド人の行動とアイデンティティに与える影響を明らかにした事例（寺本）に触れている。

以上の先行研究の批判的な検討を通して提示された分析の枠組みは以下の通りである。戦後沖縄の帰属と返還の問題がかかわる 1945-1972 の期間におけるハワイの沖縄系移民のエスニシティは、ヤマトと沖縄の関係に条件付けられてきたこと。そしてこのヤマトと沖縄の関係に影響を与えてきたのが、(1)戦前からのヤマトと沖縄の関係、(2)ハワイでの沖縄系移民と他府県人との関係、(3)冷戦下の国際条件、(4)米国占領下の沖縄を取り巻く環境、米国の対沖縄政策、沖縄移民にとっての沖縄問題、(5)米国の準州ハワイの地域性といった要因で、戦後ハワイの沖縄系移民のエスニシティの変化は、このような重層的な構造との関連で分析が行われることが示されている。

第 1 章では、 沖縄系移民が定着したハワイでヤマト/ウチナンチューの関係がどのように形成されてきたのか、その過程について記述している。琉球処分後の沖縄とヤマトの関係が強いる不平等な関係が、移民先のハワイにおいても沖縄系移民と他府県人との間の関係に再現され、このような両者の差別的な関係はハワイ生まれの二世にも引き継がれていることを明らかにしている。ハワイ社会での差別への抵抗として、アメリカ的教育を身につけること、社会主義運動への傾倒、そして大日本帝国の臣民たるべく、沖縄人としてのエスニシティ/「オキナワン」であることをスティグマ化し、日本への積極的な同化の試みが見られたことが明らかにされている。

第 2 章では、第二次世界大戦とハワイ社会の状況が述べられている。日米開戦により、ハワイ社会のエスニックな問題が不問にされ、「アメリカ人」か「日本人」かの二項対立のナショナリティを迫る状況が示された。アメリカ人としての「忠誠」と「服従」を示した結果、戦後のハワイ社会における日系人の社会経済的地位が上昇する中で、白人中心の米国社会に差別撤回を求め、権利要求運動を展開するが、真のアメリカ人となるため、沖縄系移民も「オキナワン」ではなく「日本人」の枠組みに留まることが示される。一世の市民権獲得が可能となる状況の中で、自らの呼称も「日本人」、「日系人」、「日系アメリカ人」へと変化していった。他方、戦時にともに戦った同胞意識から、沖縄系移民と他府県人の関係に見られた溝が消滅したかに見えたが、沖縄戦は沖縄系移民の意識に対して、異なるインパクトをも

たらしたことが示唆される。

第 3 章は、沖縄系移民の視点から沖縄戦を捉えている。日系人としての枠では捉えきれない、民族滅亡の危機に瀕する沖縄への想いから、海外の沖縄系移民によるトランシナショナルな救済運動が展開する過程を記述している。沖縄救済運動が、米国/日系社会から際立つ存在としての懸念が抱かれる一方で、スティグマ化されていた沖縄系移民のエスニシティを「誇り」に変えた重要な契機となったことを、重層的なアイデンティティの構造との関連から明らかにしている。つまり、二重の差別解消のために、日系人社会とハワイ社会への二重の同化の努力を続けると同時に、「オキナワン」であることに積極的な意味付けがなされ、エスニシティの「回復」が見られた。また、沖縄人連合会の活動が救済運動から文化活動へと移行する中、二世の組織も誕生し、ハワイ社会の中で独自の「沖縄系アメリカ人」のあり方が模索され始めたことが示されている。

第 4 章では、米国の占領下における沖縄の帰属問題を沖縄系移民がどのように認識していたかを検証している。沖縄の分離に肯定的な見解が多数を占め、その背景として、(1)移民前の本土からの差別がハワイでの他府県人との関係に反映されていること、(2)第二次大戦で日本が沖縄を見捨てたこと、(3)ハワイ社会での沖縄人の発展の可能性、(4)冷戦の進行と沖縄基地の重要性が挙げられる。前章で触れた沖縄救済運動が帰属問題の認識に与えた影響については、問題は帰属すべき国家ではなく、民族としてのあり方と植民地主義イデオロギーからの解放が問題であるとした。また、沖縄系移民の意識のあり方に影響した地域の要因として、帰化権獲得とハワイ州立化運動があり、いずれも二重の意味での「二級市民」、つまり市民権を持たない一世と本土に対する準州扱いのハワイに住むことから生じる問題への取り組みであった。とくにハワイの立州化に反対する理由、つまり日系人の中でも沖縄系移民の間に共産主義者が多数存在したとの主張は、沖縄系移民が米国政府の沖縄分離政策対して批判的な見解を表明することを困難にしていたことを示唆している。

第 5 章では、第 4 章と同様の分析視点、沖縄系移民がどのように沖縄返還問題を捉えていたのか、意識のレベルにおける変化に焦点を当てている。1952 年から 1972 年の期間は、強硬な分断政策から柔軟な文化政策への転換が見られた時期である。ハワイの沖縄系移民が対沖縄文化政策推進のための最適な担い手として巧みに取り込まれていった一方で、沖縄の分離・統治を目的とする文化政策が「オキナワン」であることの「誇り」の「回復」を加速させる契機となったことが明らかにされている。沖縄返還に対する批判論の背景については、帰属問題と同様、(1)沖縄と本土の歴史的な関係、(2)日系人社会と沖縄系移民社会の関係、(3)沖縄系移民と米国との関係、(4)国際的条件/基地沖縄の重要性といった側面について、沖縄とハワイ、世代による立場の違いを考慮に入れた分析がなされている。例えば、切実な問題は、沖縄では米国の軍事支配であり、ハワイではヤマトとの関係であった。米国の存在は、沖縄では自由と平等を制限するもの、ハワイでは発展の可能性と関連付けられた。世代の違いは、沖縄の基地問題について、二世、三世は一世よりもアメリカ市民としての立場を優先し、若い世代ほど、沖縄返還問題と基地問題を分けて考える傾向があると述べられ

ている。

第 6 章では、ハワイにいながら、沖縄の日本復帰論を主張する湧川清栄の思想と言論に焦点を当てる。沖縄系移民のエスニシティのあり方について、これまで沖縄救済運動を契機に「オキナワン」の意識を肯定する変化が生まれ、さらに沖縄の文化政策を契機に同じ意識の「回復」が加速される過程について述べてきた。湧川は、このような「オキナワン」であるというエスニシティの「回復」に対し、その「限界」を指摘し、それを乗り越える可能性を提示している。湧川は、米国の沖縄占領政策が沖縄系移民のエスニシティの変容と深くかかわっていたこと、また、エスニシティの「回復」の背後に内在した権力と暴力の構造を明らかにしている。沖縄系移民は、支配者の米国から事実上の庇護を受ける中で、「日本への復帰反対」への想いを沖縄問題の捉え方に反映させている。これに対して、権力と暴力に対する一貫した認識を持つ湧川にとって、復帰論とは、民族としての沖縄人独自の歴史・文化の誇りと自尊心、人民としての基本的権利の要求を意味していた。湧川の沖縄系移民に対する批判の想いは、植民地支配に抵抗し、人間の尊厳と地域的、民族的文化の擁護を求め、自主・自立・自治の思想を提供することであった。言い換えると、完全に権力に組み入れられた、その先を生きるためのストラテジーを提示していた。

湧川が示唆するエスニシティの限界とは、ハワイの沖縄系移民が文化政策として利用されたこと、そして、彼らにとって民族解放の問題として理解されなかったことが考えられるが、後者の限界は、沖縄とハワイでは直面する切実な問題の違いから生じている。沖縄では軍政による支配、ハワイではヤマトとの関係が問題とされたからであった。抑圧された沖縄の人びとの魂の解放を目指す湧川が、ハワイ在住でありながら、沖縄の人びとの問題とは何かを理解することができたのは、彼の批判の根底に、ハワイでの労働運動の経験とともに、沖縄が直面していた問題/沖縄の近代が抱えていた問題があったからであり、この問題自体の認識は近代沖縄の知識人の影響によるものであった。

## Ⅱ．論文審査の要旨

この論文の全体として評価できる点は以下の通りである。

第一に、沖縄系移民の個別的な論文は存在するが、全体像を示したもの存在しなかった。沖縄の中の移民問題とは、周辺に位置付けられる沖縄から世界に拡散してゆく沖縄出身者についての壮大なビジョンのテーマである。このような沖縄移民史の全体像を一定の視点からまとめた論文として高く評価できる。全体を貫く一定の視点とは、沖縄系移民のあり方を抑圧された状況/植民地主義と暴力との関連から捉える視点であり、それは沖縄の日本と米国に対する対抗と妥協の二面性についての理解を深めることを可能にする。

第二に、全体を貫く政治社会状況への言及で、近代沖縄史から復帰前後までの政治社会状況を背景に、沖縄系移民に焦点を当てた点である。具体的には、各章で当時の政策に言及し、明治政府と戦後の軍政下へと沖縄が組み込まれていく過程が示されている。重要な点は明

治期の琉球処分から1972年の復帰に至る期間の背後にある日米関係の大きな力の存在に気付かされることで、論文の随所に日本と沖縄の関係、抑圧/被抑圧の象徴的な関係が示されている。沖縄系移民のエスニシティの「回復」の過程が、このような政治社会的な状況を踏まえた上で論じられている点がこの論文の特徴の一つである。

第三に評価できる点は、分析に用いられた多数の資料についてである。ハワイと沖縄での定期刊行物・新聞記事（ハワイでは主要な英字・邦字新聞各々2紙ずつ）以外に、面接とアンケート調査、そして湧川に関連する未発掘論文（ハワイタイムス100頁以上の原稿/復帰論）と80頁にわたる手記といった資料は、全体として新しい資料を構成し、新たな手法として国際社会学的なアプローチを可能にしている。

続いて、湧川清栄を取り上げたことへの評価についてであるが、湧川が歴史的文脈の中からどのような社会構想を作り上げてきたのか関心が持たれるところである。当時のハワイで復帰論を扱う困難にもかかわらず、湧川の復帰に込めた想いは、ハワイの沖縄系移民、アジア系移民、そして今日の地域的な課題に通じるものである。なぜなら、現代社会の課題に向き合う際の示唆、つまり自立、自律、自主に行きつくからである。湧川から得られるもう一つの重要な点は、虐げられた者が共有する想いが、普遍的、根源的な認識となりうるのかといった問いを投げかけている点である。最後に、50 年を経過しても変わらない問題が存在する中、湧川自身の見方が歴史的視点と国際関係/重層的構造の視点を備えていたのではないかという点が示唆される。

関連する研究分野へのメリットについてであるが、沖縄研究に対しては、この論文が沖縄の近現代史に関わる問題を内包している点、移民の背景としての「意識」に焦点を当てたこと、近代沖縄を理解する上での知識人のあり方に触れている点が挙げられるが、第二次世界大戦が沖縄系移民に対して、沖縄とは異なるインパクトをもたらした点については、戦後史においても取り上げられてこなかった。

次に移民研究に対して、この論文はハワイ沖縄系移民の調査研究における蓄積に貢献すると同時に、国際社会学的研究の視点を反映させた研究であり、受入社会にとどまらず出身国と受入国の関係と、国際社会の存在を考察している。評価できる点は、出身地と移住先の関係がエスニシティのあり方に影響することを明らかにした点である。ハワイ以外の沖縄系移民の「回復」のケースとの比較が待たれるところである。また出身国での抑圧/被抑圧的な関係が移動先で再現されるという現象に対する研究は、クルド人の事例とともに、これからの重要なテーマとなることが期待される。

続いて、エスニシティ研究へのメリットとしては、沖縄系移民のエスニシティの「回復」とその「限界」を論じることで、彼らが諸条件の下で絡み取られ、異民族支配としての問題を捉えきれなかったことを明らかにした点である。こうした成果は、国際関係学的アプローチによる、第二次大戦/植民地支配からの解放についての研究蓄積に大きく貢献すると言える。さらにエスニシティ研究に対して、歴史的、思想的、国際関係学的な視点を踏まえたことの意味は小さくない。

最後に問題点についてであるが、第 6 章では湧川と知識人の関係について述べられ、そのつながりの存在が示唆されている。しかし、つながりの存在に対する証明は十分尽くされていないのではないか、むしろ溝があるのではないかとの指摘があった。具体的には、どのようななつながりが見られたのか、例えば、コスモポリタニズムと、湧川の人としての根幹をなす植民地主義/民族解放の問題意識の間にはどのようなつながりが見られたのか、踏み込んだ分析があってもよかった。このようなつながりの部分が証明できれば、知識人と湧川の断絶ではなく、連続性を追求したことの意味が明らかになるはずである。

**審査結果**

審査委員会は論文が主題の重要性、資料の収集と分析において学術論文として高い水準にあり、内容においても先行研究に付加したものが多くあり、国際社会学とくに移民研究とエスニシティ研究の学問領域に貢献するものとして認めた。したがって、申請者に博士（国際関係学）の学位を授与することを全員一致で決定した。

2023 年 2 月 13 日

| | | | |
|---|---|---|---|
| 論文審査員 | （主査）津田塾大学 | 教授 | 三澤健宏 |
| | | 教授 | クリス・バージェス |
| | | 准教授 | 川端浩平 |
| | 琉球大学 | 名誉教授 | 比屋根照夫 |
| | 津田塾大学 | 名誉教授 | 小倉充夫 |